

無常篇

映画文学人生論

- 086) 無法松の一生 監督：稲垣浩 原作：岩下俊作
087) 大菩薩峠 監督：内田吐夢 原作：中里介山
088) 宮本武蔵 監督：内田吐夢 原作：吉川英治
089) 火宅の人 監督：深作欣二 原作：壇一雄
090) 阿弥陀堂だより 監督：小泉堯史 原作：南木佳士

行く川のながれは絶えずして、しかも本の
水にあらず

この世のすべては無であり、諸行無常である。
空であり、色即是空である。

お釈迦様の教えのとおりかもしれない。この無
常感ないし空観は子どもの頃から葬式や法事でお
経を聴いて耳に入っている。学校の教科書に掲載
されている文学作品でもなじんでいる。ささやか
ながら自分が生きた体験からも悟っている。

誰が何と言おうと、自分もふくめて人間の意見
はあてにならない。科学の法則はほぼ正しいとは
いえるが、絶対に正しいとはいえない。ある粒子
の運動量と位置を同時に正確に知ることが、原理
的に不可能。これを不確定性の原理というが、こ
の原理もまた不確定ではないだろうか。

行く川のながれは絶えずして、しかも本の水に
あらず。とはいっても、人間には生への意志が
そなわっている。生きたいという本能につき動か
され。個体と種の保存を忘れない。そこで、無常
を感じさせるとともに無常に抵抗するヒントも与
えてくれそうな作品を五篇選んでみた。

稲垣浩	無法松の一生	岩下俊作
内田吐夢	大菩薩峠	中里介山
内田吐夢	宮本武蔵	吉川英治
深作欣二	火宅の人	壇一雄
小泉堯史	阿弥陀堂だより	南木佳士



無常篇

映画文学人生論

無法松と机龍之介は架空の人物、宮本武蔵と壇一雄は実在の人物。みんなぎらぎらしている。つきあいたいとは思わないが、男としての魅力はあり、女にはもてる。

善人か悪人か。作者は読者が感情移入しやすいように魅力的な人物として描いているが。どちらかといえば、悪人の部類に入るかもしれない。魅力的な悪人——善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。

それにひきかえ、『阿弥陀堂だより』の登場人物は花見百姓、パニック障害の女医、九十六歳の堂守、末期ガンの患者、言語障害の娘——みんなさびしげな廃村でひっそりと暮らしている。あまり世の中の役に立ちそうもない人物ばかりだが、やはり「うそをほんとうらしく」描く作者の手腕によつて魅力的な存在として描かれている。

要するに、奢る人は久しからず、奢らぬ人も久しからず。善人も悪人も等しく滅びる。この世はただ春の夜の夢の如し、であろうか。

しかし、もしかしたら、作者の文学的誇張や映画的誇張に幻惑され、だまされているのかもしれない。作者とは何者であろうか。作者が善悪の彼岸にいとすれば、読者も善悪の彼岸に立っているはずだ。無常感そのものも無常だとすれば、この世のすべてが無常ではない可能性もある。

時の日の無常迅速時知らず